
こんな世界イヤッ！

瀬良蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな世界イヤッ！

【Nコード】

N9339H

【作者名】

瀬良蓮

【あらすじ】

高校受験の入試を明日に控えた自称ヲタクの飛鳥。入試直前に聞こえた声。そして異世界に飛んじやった！？飛鳥は無事元の世界に帰れるのか？そんな飛鳥の異世界トリップラブコメファンタジーです。作者まだ未熟者で文章力が乏しく、誤字脱字とかあるかもです！ごめんなさい（^| ^;）頑張りますので応援よろしく願います♪

第零話：プロローグ

どこにでもある普通の二階建ての一軒家。只今の時刻は二十二時。高校受験を明日に控えた少女は戦っていた。

——カチカチ ポチ！カチカチポチ！カチポチ！

——タラララーララータッタラー！

「やった！やっとならしたよー」

ゲームだった。内容は王道系のRPGで、彼女はそのクリア後に条件を満たせば登場する裏ボスと戦っていた。

裏ボスとは通常のシナリオを最後まで進むと出てくるラスボスより、数倍の強さを誇る最強の敵。

彼女は二時間掛けて裏ボスを倒した。

「いやー強かった！まさかラスエリ10個も使うなんて。しかもブツブツ——」

裏ボスを倒した事が未だ興奮覚め止まずぶつくさ言っている。

彼女の名前は、島谷飛鳥しまたにあすか十六歳。髪はセミロングで軽くウェーブがかかっていて、髪色は金色を通り越して色を抜いたカナリーイエロー。分かりやすく言えばレモンの色を薄くした色。本人は地毛と
言うがしっかり染めている。

身長は165センチで、体重は秘密。43キロだ。

まだ中学三年女子にしては身長は高く、その為中学の部活も女子バスケ部に所属していた。運動神経も学年トップクラス。発育も良くて胸もCだ。と、本人は言い切る。顔立ちは目鼻立ちは通り整っている。特徴は美人な母親譲りの大きな碧色の瞳だ。

飛鳥の母親はフランス人で父親は日本人。

つまり飛鳥はハーフなのだ。

そんな綺麗な碧色の瞳をもつ飛鳥も父親の血を継いでおり、産まれた時の髪の色は黒。物心ついた年頃になった飛鳥は瞳とのギャップに激怒して親の反対を押しきって今の髪の色に変更した。

なぜあんなに綺麗な母がお世辞にも良いとは言えない顔の父親を選んだのか、飛鳥は理解できなかった。

小さい頃に飛鳥は二人の出会いを聞いた事がある。その時母から聞かされたのは――。

「昔ね、私がこっちに来て危なかった時に今のお父さんが助けてくれたのよ。それがきっかけ……かな？」

母は少し顔を上気させて話してくれた。

お互い娘の目も憚らずらちゅらちゅして年々熱々のバカップルだ。呆れる飛鳥だがそんな二人を見るのは何故か嫌じゃなかった。

飛鳥の趣味は読書、映画鑑賞、音楽鑑賞、バスケ。これが飛鳥の表向きの顔。

実際は上記の物十ゲーム、アニメ、ラノベ鑑賞、某巨大掲示板での交流、etc

はつきり言えばヲタクなのだ。

だが同年代の子にそんな子が居たとしても体裁を気にする飛鳥がそんなキモヲタ君に近付ける分けもなく、飛鳥はいつも一人でヲタク生活を楽しんでいた。

しかし高校に入ったら新しい出会いがある。同じような人がいるかもしれないし。飛鳥はそう思いながら未だ決まっていない高校入學に胸膨らませて、ベッドに入り瞳を閉じた。

「……あ。受験勉強してないっ！」

慌ててベッドから降りて机に向かう飛鳥。

飛鳥は頭は良くない。

しかしそこまで馬鹿ということもなく、中の上と言ったところだろうか。

この日飛鳥は一夜漬けを敢行して、受験に臨んだ。

県立聖ヶ丘高校。一応進学校ではあるが、県内トップクラスという訳でもなくて普通の進学校。

飛鳥は蕾がまだ芽吹かない桜の木が傍らにある校門の前に立つと、一度大きく深呼吸して高校に足を踏み入れた。

「――よし。かんばろう！」

校内に入ると飛鳥は周りとの視線と戦っていた。

原因は飛鳥の容姿。碧色の瞳で明るすぎる髪の色、スラッと細長いモデルの様な脚。飛鳥は男女問わず様々な受験生、教員の視線を集めていた。

「懐かしいなあ。確か中学の時も同じ反応だったっけ？ 見られるのは慣れてるけどこれだけの人に見られるのは恥ずかしい。そろそろ“来る”ころかな」

すると分厚い眼鏡をかけた髪の薄い男子教員がこちらに走ってきた。

「君、どこの中学から来た受験生だね？こんな頭で来るなんてどういふつもりだ！」

男子教員は走って来たせい、髪は乱れ息を少し荒らして聞いてきた。

飛鳥は学生鞆から用意していた自分の住基カードと小さい時に撮った、母とのツーショットの写真を取り出した。

「私は涼宮中学から受験に来ました島谷飛鳥です。これに私の戸籍が載ってる住基カード。これが母と私の写真です。何か問題あります？」

男子教員はカードと写真を受けとると確認して飛鳥に返した。

「君は外国人の母親と日本人の父親のハーフか。すまなかったね。いきなり問い詰めて」

「いえいえ。慣れてます。初めての方なら仕方ないですから。この髪色は校則違反に当たりますか？」

「本来なら、ね。だがそれなりの理由があるなら別だよ。君のようにね。わが校の校訓は誠実・丁寧・真心だ。気にする事はない。引き留めて悪かったね？受験頑張りなさい」

飛鳥は軽く会釈してその場を後にして受験会場の教室に向かう。教室に入ってから飛鳥を見る好奇の目は減ることはなかった。受験カードに書いてある番号の席に座る、しばらく参考書を読ん

でいたが落ち着かない。

——ハ……キテ……

「いっ！痛っつ……何？」

飛鳥の頭の中に囁くように呟かれた声。

——ジ……ン……イノ……

「——つうツ！何なのよこれ……」

少し時間が経つと飛鳥に聞こえた声は聞こえなくなり、頭の痛みも引いてきた。頭に手を置くと額には汗をかいていた。

「まだ時間には余裕があるよね」

飛鳥はそう言うと言席を立ち手洗い場に向かう。女子トイレに入り、鏡の中に映る自分を見た。少し肌が青白い。ハンカチに水を含ませて額に当てる。

落ち着いた飛鳥は鏡に視線を戻すと——

「——え？何これ……」

鏡には輝く光が写っていた。飛鳥は呟きその光に手を伸ばす。

——ゴ……ンネ……モ……ル……テ……

飛鳥が光に触れた瞬間、飛鳥に囁くようにまた声が聞こえた。

「――謝って、る？　いつ！　痛……い」

飛鳥が触れた光は瞬間、黒光りして飛鳥は掴まれたように引っ張られる。

「！！　ちよ、ちよっと何これ？　誰かいない！？」

飛鳥は周りを見たが誰もいない。

「ちよ！　勘弁だからこんな展開！　小説でよくあるベタな――キヤアアア！」

飛鳥は黒く光る鏡の中に吸い込まれていった――。

第一話：異世界

ここはもう一つの世界。世界の名は【ディノア】
地球―【ガイア】と対なる世界。

この世界は三つの大陸に別れている。

魔法王国シルフィニアが治める豊かな自然と海に恵まれたフェルド大陸。

武装王国ラグランドが治める年中雪が降り積り、様々な優れた製造技術を誇るスノウディア大陸。

最後にエルフ族が治める王国フランソワ。森に囲まれた自然の要塞ウッドネル大陸。

この世界に一人の少女が舞い降りる。

シルフィニア魔法王国。浜辺に一人の六歳位の少女の前には円形の魔方阵が形成され、その周りには四人の老公達と少女の側近である若い男がいた。

「――見つけました」

少女がそう言うのと周りの老公達はざわつく。

「反応がない、です……思念を送ってみます」

少女は少し辛そうな表情だ。

（――はやくきて）

（――じかんがないの）

「――クッ！はぁ……はぁ……」

少女は片膝をついた。

「大丈夫ですか！レイア様！」

側近の男が少女レイアに駆け寄る。

「大、丈夫ですレイ。失敗は出来ませんから。少し強引ですが最終手段です」

（――ごめんねゆるして）

「――来ます！」

レイアの言葉に周りの五人も魔方陣に注目する。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………あれ？」

レイアは焦った。

その時——！

——ザッバアアン！！

魔方阵に召喚されずに海の上に彼女は召喚された。

「ゴバデダジュガボブ！！ブハッ！誰がが！だずげでっ！」

レイアを含め六名は突然の事で言葉も出ず動けなかった。

「だであー！ブクブクブクブク……」

その状況を理解出来た側近レイが素早く動く。

「救護隊員の要請と城に対応要請を！」

そう言うとレイは海に飛び込んだ。

「——ブクブク（もう私ダメなのかな？ダメ？何がだめ……な）」

彼女、——飛鳥は海の中で意識を失った。

翌朝——飛鳥が目を覚ますと見知らぬ天井が目にはいった。

「……夢だね。うん夢だよこれは。二度寝しよう」

飛鳥がそう呟くと――

「――！女王様！お氣付きになられたのですね！」

飛鳥が顔だけ横に向けると。いかにも！私は侍女！って服に書いてそうな女性が瞳に涙を浮かべこちらを見ている。

「……（女王様？誰が？っていうか――）ここ何処よ！？」

飛鳥は落ち着いて状況を考えてみて焦り出した。

「てかあんた誰！？受験は！？教室は何処よ！？ここは誰！？わたしはどこ！？んだぁー！！！」

パニックになり頭をワシャワシャ掻きながら飛鳥は唸った。

「お、落ち着いてくださいませ！私は女王様専属の侍女のマヤと申します。説明は後程女王様代理と大臣達が説明の場を設けます。ところで御身体の方は大丈夫ですか？どこか痛む所はございませんか？」

マヤのお陰により少し落ち着き。耳を傾けることが出来た。

「……ふう。ありがとうマヤ。少し落ち着いた。身体は……うん。何ともない、大丈夫。って何この服？」

飛鳥が自分の身体に目をやると、純白の程よく薔薇の刺繍の入ったドレスを着ていた。

「それは寝衣です。恐れながら私が服を着替えさせて頂きました。

お気に召さなかったでしょうか？」

これが寝間着なんだ……こんなので寝たらシワとか気になって寝れない。

「……いや。ありがとうございます。私の服は？」

マヤが目を見開いた。

「――！！女王様！私のような者にその様なお言葉使いはおやめください！」

「……いやいや。女王様って、まあいいや。で、服はどこ？」

「はい。ずいぶん汚れていましたので洗濯して、今はあちらのクロ―ゼットの中にございます」

「そっか。ありがとう。じゃあ着替えるから」

「はい」

飛鳥は起き上がり、クロ―ゼットに向かう。そして開けた――。

「うわぁ……何これ？」

そこには二十着ほどの色とりどりのドレスと一着のセーラー服。

「申し訳御座いません。何分急だったもので、このような品しかご用意することが出来ませんでした」

「……ははっ。そ、そうなんだ？これで十分じゃない？（てかドレスなんか着ないから）」

飛鳥は迷わずセーラー服に手を伸ばし手にとる。

「ドレスにお着替えなさらないのですか？」

マヤは少し寂しそうに聞いてきた。

「うん。着ない。何か分からないけどね。着たら何かを認めてしま
う気がして嫌なんだ」

「そう仰られるなら仰せのままに。では、失礼します」

マヤはそう言うのと、いきなりしゃがみ寝衣の中に手を入れてきた。

「——ちょ！何してんの」

飛鳥はマヤから離れた。

「はい？何とは？お着替えのお手伝いをさせて頂いているのですが」

「いやいやいやいや！そんな事一人でするから」

本日二回目。マヤは目を見開いた。

「なりません。それが勤めですから」

マヤはニコッと笑顔を向けてくる。

「……（眩しいっ！悪意0%の笑顔！けど——！）……いやいやいいから」

「なりません」

「いやいいから」

「なりません！」

「いいから」

「なりま——！」

「——怒るよ？」

マヤは九十度に腰から頭にかけて曲げて謝る。

「も、申し訳御座いません！お許しくださいませ」

「うっ！いやごめんね？私もせっかくの好意を無下にして。でも恥ずかしいしほんとに大丈夫だから」

飛鳥は悪い事はしていないはずなのに罪悪感を感じた。

「はい。失礼しました。おではその間にお目覚めになった旨をお伝えして参ります。着替えがお済みになりましたらお呼びください」

マヤは一礼しドアの前でも一礼すると部屋を出た。

「はぁ。何か大変な所に来ちゃったなー。ここどこだろ？日本語通

じるから外国じゃないよね？」

飛鳥は制服に着替えながら呟く。誰かに言いたい訳じゃない。こうして自分に言い聞かせてないと、怖くて、泣きそうでしたまらなかつた。

「それにしてもこの部屋すごいよ。こんな大きい三面鏡見た事ないし。それに私が寝てたベッド。これヤバくない？どこのお姫様ベッド？ダブルだし。初めて見たよ。天井も高いし、外の風景も、ん？風景？」

飛鳥はガラスの薄い扉を開けて、テラスに出た。

飛鳥は言葉を失った。思考も停止し、呼吸することも忘れるぐらいの風景がそこにはあった。

眼前に広がる、広大な城下町。ここは、飛鳥のいる場所は城の最上階だった。城から真っ直ぐ長く続いている大通り。そのメインストリートは左右に広がる色んな色や大きさの建物。メインストリートの先にある巨大な門。

城が街を包むように門まで続く高い城壁。

何もかもが予想外で想定外だった。

「……なによこれ？私結構ヤバめな状況？」

飛鳥は頭を抱えた。泣きそうになるのを堪えた。叫びたくなるのを抑えた。飛鳥は深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

「……まずは情報。何も分からないんだから何も考えなくていい。分かった時に考える。よし。たしか説明してくれるって行ってたよね」

よし。会って確かめる。なんか理由知ってるみたいだし。大臣？
って人に、ここはどこなのか、何で私が喚ばれたのか。全部。
飛鳥は覚悟を決めて、マヤを呼んだ。

「マヤー！いる？」

扉の向こうに向かって喋ってみる。

——コンコンッ！失礼します。

そう言ってマヤが入ってきた。

「随分お時間が掛かったようで。やはり変わった服装ですねそれは。
どこかの民族衣装のような特殊な服なのでしょうか？」

「んー。仕事着みたいなの？決まった事をするときに着る服だから。
それより、話してくれるんでしょう？その人たちの元へ連れてって」

マヤは一瞬ドキッとした覚悟を決めたあの青色の瞳に。

「はい。準備が整いましたようなのでご案内します」

マヤと飛鳥は部屋を出て会いに行く。

残酷な運命を知りに。

第二話：激怒

飛鳥はマヤに連れられ部屋を出る。ここは城。頭で理解していてもやはり實際目の当たりにすると驚いた。

廊下を出ると横の幅が広い。十人位は並べそうな幅で壁にはどこかの著名な画家が描いたのであろう肖像画や風景画があり、廊下の所々には高そうな陶芸品や鎧兜が置かれている。

飛鳥はその非日常な光景を見ている現実に戸惑いキョロキョロと落ち着かない様子だ。

飛鳥の居た部屋は最上階であの部屋だけしか部屋はなく、階段を降りるとそこには階段を守るかの様に立つ二人の衛兵がいた。

——ザザッ！

衛兵は飛鳥の姿を見ると階段を離れて端に移動し膝をついて頭を下げる。

「……な、何してるの？この人たち」

いきなり衛兵が動いたので飛鳥はビクツとしながらマヤに聞く。

「それは女王陛下のお通りですから。当然の礼儀です」

「……ねえマヤ。その女王陛下って本気？間違いじゃないの？」

飛鳥は未だに信じられなかった。少し前まで中学三年生のヲタクが一国の主という事実が。

出世どころの話じゃない。質の悪い冗談ならやめてほしい。飛鳥は

そう思っていた。

マヤはピタリと立ち止まりこちらに振り向く。その表情はさっきまでの穏やかな表情ではなく、真剣そのものだ。

「はい。間違いはありませんし、見間違うはずありません。その碧色の瞳は……」

マヤはそう言うとともに穏やかな表情に戻り再び進む。

「……そっか」

飛鳥は考えていた。

（はあ……テレビ企画やドッキリの類いじゃなくて本当なんだこれ。マヤも嘘を付いてるようにも見えなかったし。これあれかな？よく小説とかでよくあるあのーそう、異世界に召喚？洒落になんないよそれ？私あんなストーリーに憧れないもん！だって携帯は？テレビは？アニメは？ゲームは？ニコ動画は？漫画は？ないじゃん！それは私の生き方を否定されたと同義！そんな所で生活なんてムリだから！）

「――様？女王様？着きましたよ？」

「ん、ああ。ごめん。ここは？」

マヤに呼ばれ現実逃避の旅から帰還した飛鳥

「ここは第一会議室です。行っってらっしゃいませ」

「会議室かー。ってマヤは来ないの？」

「はい。ここは限られた人間しか立ち入る事が出来ませんから。お待ちしております」

「そうなの？まあいいけど。それじゃあ行ってくるね」

飛鳥はそう言うのと扉を開けた。

少し前の会議室――

「ねえレイ。ほんとに大丈夫かな？女王様は怒ってないかな？私の事怒らないかな？」

心配そうに少女――レイアが側近の男――レイに尋ねる。

「……レイア様もう八回目ですよそのお言葉。大丈夫ですよ。シルアスカ様のご息女様なんですから心配いりませんよ。正直に話して許してもらいましょう？」

「う、うん。がんばって許してもらおう」

この部屋には三人がいる。一人はレイア、もう一人がレイ、もう一人は――

「最初にこの世界の説明、召喚した理由など細かい所は私がしましょう。レイア様もその方がいいでしょう。その後に謝罪すればいいですよ。レイア様だけが責任を感じる必要はありません。私たち大

臣も責任を感じております。それに暗い顔をしていては女王様に嫌われてしまいますよ?」

優しい口調でレイアに諭すねは。大臣の束ねる総大臣のベルオス。

「うん。そうだね」

レイアの表情も少し柔らかくなる。

――その時。

――ガチャ!

セーラー服を来た飛鳥が会議室に入ってきた。

飛鳥は三人をそれぞれ見たあとにぺこっと頭を下げる。つられて三人も頭を下げた。

三人は飛鳥の出方を伺っているのか喋らない。堪らず飛鳥は喋った。

「……あのさあ。私なにも分からないんだよね。だからどこに座ればいいのか教えてくれない?」

少し不機嫌そうに喋った飛鳥。勝手に連れて来られたのだから不機嫌にもなる。ベルオスが対応する。

「そうですね。申し訳ありません。奥の椅子に座って頂いてよろしいですか」

ベルオスが指したのは会議室の一番奥にある豪華な椅子だった。飛鳥はなんかスッキリしないがその椅子に座った。

飛鳥から見て左にレイアとレイ。右にベルオスが座っている。飛鳥が座るのを確認するとベルオスが席を立ち説明を始めた。

「まず最初にこの世界の――」

「ちょっと待って」

飛鳥がベルオスを止める。ベルオスは何か？という顔をしていた。それがまた飛鳥は気に入らなかった。

「まず最初に説明の前にすることがあるでしょ？私あなた達の名前知らないし」

「ふむ。それもそうでしたな。挨拶が送れて申し訳ございません。私はこの国の総大臣のベルオス。」

茶色のローブを纏った少し痩せた老人だ。瞳は鋭く白い髭を胸元まで生やしている。

ベルオスがそう言う続けて二人も立ち上がり自己紹介をした。

「わ、私はシルフィニア魔法王国第一王女レイアフエルドです」

少し不機嫌な飛鳥が怖かったのか、目があったらすぐ逸らされた。チラッと見えた瞳は綺麗な青空のような瞳でクルンクルンの金色の髪の毛が特徴の可愛い子供だ。

「私はレイア様の側近のレイと申します。お会いできて光栄です」

そういったレイは真っ黒な瞳に真っ黒な髪、左目が髪に隠れていて、殴ったら折れるんじゃない？って思う程細い体をしている。

三人の自己紹介が終わると飛鳥は喋りだす。主導権を渡す気はないらしい。

飛鳥も馬鹿ではない、召喚されたという事はわかっていた。それに召喚されたという事は私が必要だという事を理解していた。

「まず最初に私の名前は島村飛鳥。今はかなり不機嫌です。質問は私から。異論がある方は挙手してね？ここまでok？」

三人は戸惑いながらも頷ずき返事をした。まさか飛鳥がとった行動が予想外だったのだろう。

飛鳥は三人が頷いたのを確認すると話します。

「まずここは何処でどんな世界か教えて」

それを聞いたベルオスは答えた。ここはもう1つの世界という事、三つの大陸に分かれ、それぞれの大陸を納める王国が三つあること。その内の一つがここシルフィニア魔法王国という事。

それを聞いた飛鳥は想像していたとはいえ軽く目眩がした。それでも飛鳥は落ち着いて質問を続ける。一番聞きたかった事を。

「この世界の事は何となくわかったわ。次にこれは重要、嘘なんかつかずに本当の事を話してね？私をこの世界に“拉致”した理由について」

飛鳥は少しトゲのある言い方をした。私を召喚したことをどんな風に捉えているのか知リたかったからだ。もしベタに悪気もなくこの国を救ってほしいと言ったら――

「拉致なんてとんでもない！飛鳥様にはこの国をお救いして頂く為に召喚させていただき――」

「もういいわ。黙って。何が拉致じゃない？私の都合も意見も関係なしに連れてきていて拉致じゃない？ふざけないでよ！それを拉致っていうんでしょ！勝手に連れてきて何勝手な事言ってるのよ！その上国を救えって？馬鹿じゃないの？そんなこと言われてはい頑張りますっていう程あたしは馬鹿じゃない！もうたくさんよ！私を召喚したのは誰！本当ならぶっ殺してやりかいかいけどもうどうでもいいわ！早く元の世界に帰して！こんな世界イヤッ！」

今まで溜まっていたストレスや抑え込んでいた気持ちが爆発した。飛鳥は涙を両目一杯に溜め、息を切らし激怒していた。

レイはあまりの飛鳥の剣幕に驚いたのか啞然としており、レイアは責任を感じていたのでまさかあそこまで飛鳥が怒ると思っていなかった為泣きじゃくる。

ベルオスは眉間に手を当て目を瞑り自分が言ってしまった事を後悔していた。拉致という言葉に反応して一番言っただけじゃない言い方をしたのだ。飛鳥があえて拉致という言葉を出した理由も分かっていたがストレートに言ってしまった事を悔やんでいる。どうにか飛鳥に弁解をしようとした時――

「準備が出来たら報告して！こっちは受験すっぱらかして浪人生活決定で大変なんだから！この国がどうなろうが知ったことじゃないわよ！」

相違って飛鳥は会議室を出ていき部屋に戻った。

第三話：絶望

飛鳥が出ていった会議室ではレイアの鳴き声だけが響いていた。

「ひっぐ ひっくっ どうしようレイー。飛鳥様すんごい怒ってたよね」

レイアは泣きながらレイに聞いてきた。

「は、はい。すごかったですね。怖かったです」

レイはあまりの女性との免疫がないため飛鳥の行動に戸惑っていた。

「私のせいでしょう。すいませんレイア様。それにレイも。私としたことがあんな事を言ってしまうとは。情けない限りです。飛鳥様がお怒りになるのも仕方がないというものです。さて、どうしますかね」

するとレイアが――

「私！謝ってきます。許してもらえるか分からないけど謝らなくちゃいけないし。それにこの国の為にも飛鳥様は大切な人だから。飛鳥様はこんな国言って言ってたけど私にとってここは大事な国です」

「……レイア様。確かに今私が行って謝ったところで許してもらおう事など無理でしょうし話すら聞いてもらえないかもしれないかもしれません。伝えなければいけない事があるというのに……。心苦しいですがレイ

ア様、その事もお伝えしてもらってもよろしいですか？大変危険ですが、飛鳥様もあなたになら危害も加えないでしょうし。」

——怖い。けど伝えなくちゃいけない。

「——はい。大丈夫です。レイもここにいて。大丈夫だから」

レイはレイアの事を心配するが、本来レイは国政とは無縁の者。レイアの側近というだけで、レイ自身が関与することはあまりない。

「はい。レイア様。お氣をつけて」

「うん。行ってきます」

レイアは努めて明るくそう返事をする。

レイアが会議室を出て飛鳥の元に向かった。

「——上手くいけばいいのだが……」

ベルオスは悔しげにそう呟いた。

最上階女王陛下の間――

「何あいつベルオスって奴！最悪の返答してきたし！また腹がたってきた！」

飛鳥はベッドに寝転びながらそう毒づくが本当は分かっていた。

異世界に連れて来られたのは飛鳥にとって迷惑な事実だ。けど自分を必要と思っていてくれるのは感じた。ベルオスの言い方は売り言葉に買い言葉。ベルオス達が本心であんな事を思ってるなんて飛鳥も思っていない。だけどやはり納得が出来なかった。言われた言葉が本心じゃないと分かっている。でもあの時怒りのままに放った言葉は止まらなかった。

飛鳥は少し罪悪感に悩まされながら呟いた。

「あのレイアって子……泣いてたよね。話だけでも聞いてあげればよかった」

——コンコンッ！

その時ノックの音が聞こえた。

「ん？」

あっ、返事しなくちゃいけないんだっけ？少し間が空いたが飛鳥は返事をする。

「はい。どうぞー？」

「——し、失礼し、ますっ！レイア・フェルド、どですッ！」

泣いてた子か。さっきはあんまり見えなかったけどまだ小さな女の子じゃない。怖がられたかな私？いくらなんでも緊張しすぎたよ。と飛鳥は思った。

「うんレイアちゃん。どうしたの？」

飛鳥は先程とは違う柔らかい表情と穏やかな口調で尋ねた。

「……………」

「——えっ！レイアちゃん！？」

レイアはてつきり怒られると思っていて。飛鳥の優しい、そして懐かしく感じる笑顔を向けられて涙を流していた。

「——す、すいません！お話……いいですか？」

レイアは涙を拭いて今度は目を逸らすことなく聞いてきた。

「うん。大丈夫だよ。どうしたの？」

「——ごめんなさい飛鳥様！飛鳥様を召喚したのは私なんです！」

レイアは頭を下げ謝罪した。

「えっ？そうなの？なんだ！てつきりベルオス、さんかと思ったよ。理由があつたんでしょ？たしかに召喚されたのは許せないよ？でももう怒ってないから」

「……ありがとうございます」

レイアは再び頭を下げる。

「だからもう謝らなくていいよ。話はそれだけ？」

レイアは少し言うのを戸惑いながらも口を開く。

「……あと飛鳥様を元の世界に返すことなんですが」

「あ！もう準備出来たの？レイアみたいな子供が召喚出来るなら大人ならすぐ出来るのかな？」

「……その事でお話があるんです」

レイアは声のトーンを落として話し出した。

「実は、子の召喚魔法を使えるのはフェルド家の血を引く者だけなんです。ここまでよろしいですか？」

飛鳥は頷く。

「その力は母が子を産んだ時に子へ引き継がれ、引き継がれた後はその母は力を失います。召喚魔法を使うと力は失われ、二度と召喚魔法を使う事が出来ないのです。そして今その力を持つのは、飛鳥様一人だけです」

「……ちょっと待って？私はその力を持つ？おかしいよそれ。私はこの世界の生まれじゃないし、私のお母さんも元の世界にいるんだよ？」

「飛鳥様はこちらの産まれではないですが、飛鳥様のお母様であるシルアスカ様は私の母である、シルフィリア魔法王国十九代女王シルレイア様の双子の妹で、こちらの世界の生まれです。十七年前にあちらの世界に旅立たれましたが」

飛鳥は黙って聞いていた。

「……あ、飛鳥様？」

「うん？ 続きは？」

レイアは飛鳥の態度や召喚魔法の力を知らない様子を見ると母親から何も聞かされてないのだと感じ、この話。つまり飛鳥の母がこちらの人間ということ話した。しかし飛鳥は驚いた様子もなく話を催促してくる。

「驚かないんですか？」

「今さら何も驚かないよ。別にお母さんがこっちの人間でも王族の人間でも関係ないから。お母さんはお母さん。今さら何も変わらないよ。さ、続けて」

「あ、はい。つまり飛鳥様にも力がある。ということなんですけど……」

「……何？」

飛鳥はレイアが放つ沈黙に“何か”嫌な感じがした。

「……この召喚魔法は自分で対しての使用は……不可能なんです……」

飛鳥は声を少し振るわせて聞いた。

「……つまりどういう事？」

「つまり飛鳥様が元の世界に帰るのは……難しいと思います」

飛鳥は絶望的な状況に考える事をやめようかと思っていた。でもまだ疑問は残っていた。

「……じゃあ、私のお母さんは何で向こうの世界に行けたの？」

「それは、代理召喚魔法と言って同じ力を持つ者が相手の力を使って召喚する方法で、使用者の魔力を失われずに済む方法です。その方法を使ったと聞いています」

この力を持つのは私の一人。こんな力じゃない。

「レイアのお母さんは？」

飛鳥は今まで見てないと思い、聞いてみた。

「……二週間前に病気で亡くなりました」

「……ごめんね？嫌なこと聞いて」

飛鳥は素直に謝る。

「いえ……大分落ち着きましたし大丈夫です」

飛鳥は一番肝心な事を聞いてみた。

「……あと一つだけ聞いていい？何で私を召喚したの？召喚魔法を

使わなかったら、レイアは力を失わなかったのに。何で私を？」

レイアは話し出した。これからの私の運命を。
決して逃れることの出来ない宿命を。

第四話：覚悟

レイアは一度大きく息を吸い込み自らを落ち着かせた。
そして何か決心した様な力強い瞳を飛鳥に向ける。

「飛鳥様。あなた様にここシルフィニア魔法王国の第二十代女王陛下になって頂きたいのです」

予想してた通りの答え。飛鳥も真剣に聞く。私を選んだのは私しか力を持つ者がいないから。でも召喚しなければレイアに力があつたはずだ。その理由が知りたい。

「……私でいけなかった理由は？」

「この国は代々女性が統治すると決まっています。ですが成人したフェルド家の血を引く者でないと王である証の精霊王との契約をすることが出来ません。なので本来は飛鳥様のシルアスカ様を召喚しこちらの世界に帰ってきていただこうと思っていました……」

「来たのはお母さんの力を継いだ私だったわけだ？なるほどね。でも成人したって言ってたけど私まだ十六だよ？ってか精霊王？なにそれ」

「それは大丈夫です。この国の法は成人は十五才と定められていますから。精霊王とは魔法を使う為の精霊の王で、その精霊王との契約がないと魔法は使うことが出来ません」

魔法……本当にファンタジーな世界に来たんだなと飛鳥は思った。

「それで私に国王になってほしいわけなのね。でもレイアじゃだめだったの？ 後十年待つとか」

その言葉を聞いたレイアは悔しそうな表情になる。

「それは隣国である武装王国ガルガンドが侵略してくる可能性があるのです。今までガルガンドはこちらの魔法を恐れ侵略してこなかったのですが、先代女王の死をきっかけにいつ動き出すか分からないのです」

確かにレイアが成人するまでの約十年の間、他国が侵略をしないとは言い切れない。むしろ確実に侵略するだろう。魔法と言う脅威が無くなった今、これ以上のチャンスはない。

「……他の国は魔法は使えないの？」

「ガルガンドは魔法は使えません。武力は強大ですが。エルフ族率いるフランソワ王国は治癒魔法に特化した一族です。攻撃系の魔法は使えません。代わりに人間より遥かに高い身体能力と自己治癒能力があり、ガルガンドはどちらにも手が出せずにいました」

「なるほど。私が精霊王と契約して王国に魔法の力が戻れば、ガルガンドも侵略してこない。ってわけね」

「その通りです。ですから！ お願いします。この国を救ってください！ 勝手な言い分というのはわかってます。ですがこの方法しかなかったんです……」

レイアは再び頭を下げる。ぽたっと足元に涙を落として震えなが

ら飛鳥に懇願している。

「……わかったよ。頭をあげて？ 私には選択の余地はないんだから
もう元の世界に戻ることは難しい。この世界にいるのならせめて
自分に出来ることはしようと思った。そう思って飛鳥は受け入れた。
現実を、運命を。」

その言葉を聞いたレイアが顔をあげて飛鳥に飛び付き大声をあげ
て泣いた。

飛鳥はレイアの頭を撫でてなだめる。

「今までがんばって耐えてきたんだよね。ごめんね？ 自分の事ばっ
かり考えてて相手の事なんか知ろうとしなかった。レイアはまだ
小さいのに立派だよ。だからもう無理しなくて良いからね？」

レイアはしばらく泣き続け、泣き疲れたのか寝てしまった。

「ふふっ。かわいい寝顔。まだまだ子供だね」

飛鳥は眠っているレイアの頬を突つつきながら呟く。

ふと外を見てテラスに出ると外はもう暗く、これからの飛鳥を見
守るかの様に星達は輝き。月の光は飛鳥を優しく包んでいた。

「もう戻れないんだよね……」

月明かりの下の飛鳥の影は寂しそうに揺れていた。

「てか、お腹空いたよ。召喚から丸一日何も食べてないんだけど……仮にも女王陛下になるんだよね私？普通『お食事をお持ちいたしました』って展開あってもよくない？」

——シーン……

「よし！いつまでもウジウジしてらんない。セルフ上等だよ。食堂かなんかあるでしょ。探索がてら行きますか」

扉の前に行き振り返る。

「レイアは……置いといいていいかな？」

飛鳥は部屋から出ていった。なぜかわからないが飛鳥はどこかのスパイのように足音を消して忍び足で進む。

「フフフ……今の私はあのスネ○クよりも隠密行動を得意とする超S級諜報員の【アスカ】だ！見つかるはずはない！」

アスカは気配を消し階段を降りていく。すると階段の先に敵兵二名を発見する。

「二名か……できれば戦闘は避けたい。よし」

アスカは壁に沿って足音を消し敵兵に近づく。

——シュッ！

一人の敵兵の後ろから首に手刀を叩き込む。異変に気付いたもう一人の敵兵が振り返る。敵兵の両目を素早くジャブで攻撃し一時的に視力を奪う。

「——うがっ！」

敵兵が目を押さえて怯んだ隙に倒れている敵兵の剣を取り未だ怯んでいる敵兵の背後に回り込む。

「動くな。わかったら両手を挙げろ。ゆっくりだ」

敵兵はアスカの言う通りに手を挙げる。

「聞きたい事がある」

「……何だ？」

——バシッ！

アスカは敵兵の膝裏に蹴りを入れ跪かせた。

「口の聞き方に気を付けろ！ 食堂はどこだ？」

「食堂だと？ そんな事聞いて——ぐっ……」

アスカは剣に力を加える。

「いいから答えろ。どこだ？」

「か、階段を降りて左手に少し進んだらそこに食堂がある」

「そうか。じゃあな」

——シュッ！

敵兵に手刀を叩き込む。倒れた敵兵達から財布を抜き取る。

「このまま置いておくと見つかるのも時間の問題だ」

アスカは敵兵を隅っこに移動さして何故か抱き締め合う様に寝かせて食堂に向かった。

食堂に行くとちょうど晩飯時なのもあり結構な人がいた。

「結構広いなー。それに400人ぐらいいるかな？ 隠密行動はここまでだね」

諦めた飛鳥は食堂の注文するための列に並ぶ。

飛鳥の存在に気付いたのか列に並んでいた人達が一斉に道をあけ始めた。飛鳥の前には誰もいなくなった。

「ん？ なに？ 譲ってくれる感じ？ ラッキー」

飛鳥はスキップしながら受付に行く。食堂のおばちゃんっぽい人がいた。

「い、いらっしやいませ女王陛下様。き、今日はこういったご用件で？」

食堂のおばちゃんは顔が引きつっている。

「女王陛下って、はあー。おばちゃんそれみんな知ってるの？」

「は、はいもちろん！ 城内でそれはもう噂になっております」

「肩身狭いなく。まあいいや！おばちゃん。えーつとあの人が持つてるの特盛でちょうだい？」

飛鳥は周りで飛鳥を観察していた青年が持っていたしょうが焼き定食のような食べ物を指して言った。

その青年はいきなり自分が指された事に驚きトレイを落としてしまった。

「あらーもったいない。おばちゃん。いくらかな？」

「！！女王陛下様からお代を頂くなんて滅相もございません！もちろん無料です！しかもこんな食堂の物を食べるだなんて、その大丈夫でしょうか？」

「え？タダなの？じゃあお言葉に甘えて。あ、でもさっき落とした子の分払うからもう一度出してあげて？いくら？それに食堂のご飯私好きだよ？」

そう言うのとトレイを落としてしまった青年は失神して倒れた。

「どうやらご飯どころじゃないらしいね？じゃあよろしくね！出来たら読んで？」

そう言うのと飛鳥は空いている席がないか見渡した。するとその視線を感じたのか、座っていた人達は急いで食事を終わらせた。

「そ、そんな避けなくても」

飛鳥は少し残念そうに呟いた。ガラガラになった席の真ん中辺り

に座り少し待っているとおばちゃんが料理を持ってきてくれた。

「おばちゃん。呼んでくれたら取りに行ったのに」

「いえいえ。そ、そんな事できません」

女王陛下様ー。料理できましたよー？なんて誰も言えないだろう。

「ありがとおばちゃん。あれ？何かこれ種類多くない？」

先程の青年が持っていたのはしょうが焼きに白米に汁物に漬物っぽいものだった。しかし飛鳥のトレイにはサラダが付いており、デザートも付いていた。

「サービスさせていただきました！お口に合えばよろしいのですが」

「おばちゃんありがとう！あ。私は飛鳥っていうの。ちよくちよくるからよろしくね？」

何故かおばちゃんも倒れた。落ち着いた後、飛鳥はようやく食事を食べ始めた。

「うまい！イケるじゃん！」

それは飛鳥の居た元の世界とほとんど変わらなかった。味も食材も食材名も一緒だった。

飛鳥がそう思いながら食べていると、少し離れた所に一人で食べている赤い髪をした深紅の瞳の鎧を着た少女と目があった。

——キラーン！

飛鳥は目を光らすとトレイを持ちその少女の隣に移動した。
少女はあまりの飛鳥の素早さに逃げる事が出来ずに固まっていた。

「一緒に食べよ！」

「……………」

飛鳥がキラキラした瞳をしながら放った言葉の意味がわからなかった少女は固まっていた。

「おい？」

「はっはい！」

「一緒に食べよ？いいかな？」

「はい！」

テンパっているのか少女はいきなり立ち上がり前方に向かって敬礼しながら返事をしていた。

「まず座って！私は飛鳥。あなたは？」

「はい！女王陛下様！私はサラと言います！」

「サラって言うんだ。私は飛鳥ね？よろしく」

「はい！女王陛下様！よろしくお願いします！」

「私は十六才の飛鳥っていうんだけどサラはいくつ？」

「はい！女王陛下様！同じく十六才です！」

——ぶちっ！

「ねえサラ？サラは何で鎧着てるの？次名前で呼ばなかったら女王陛下の命令で死刑」

飛鳥が言った瞬間ピシッと周りの空気が凍った。

「は！はい！あ、あ！飛鳥様！私は魔法剣士隊に所属している為鎧を着てるのです！」

「そうなんだ？軍隊みたいなのかな？今度見てみよう。じゃあその堅っ苦しい喋り方を直す事。逆らったら分かるよね？」

「はいー分かりますよ飛鳥様。飛鳥様は何で剣なんでもっていらっしやるのですかー？」

サラは滝のように汗をかきながら聞いてきた。

「あ。これは——」

その時食堂にベルオスが叫びながら入ってきた。

「侵入者だ！食堂に向かったとの事らしい！侵入者は女で異国の服装だったらしい！侵入者は屈強な衛兵二名を素手で倒し剣を奪って逃走し非常に危険だ！見た者はいないか！」

食堂にいた全ての視線が飛鳥に突き刺さった。

「貴様かー！って女王陛下様！！」

「てへっ」

「女王陛下様！なぜそんな真似をしたのです？」

「スリルを感じたかった。後悔はしていない」

「それはいいとして、なぜこのような場所でご食事を！」

「お腹が空いたからよ。召喚されてから一日以上経つけど待てど待てど食事が来ないし誘いも無いからこうやって足運んで来たんでしようが！何？ベルオス。まさか私に餓死しろと？飯を食うなと？」

ベルオスは顔を真っ青に染めて弁解する。

「滅相もございません！確かに女王陛下様の言う通りでございます。申し訳ございません。しかし衛兵をあそこまでやらなくてもよろしかったのでは？」

「分かればいいわよ。私もご飯が出て当たり前って思ってたのはいけないし。衛兵？弱すぎよ？鍛え直すように言っというて！こんな可愛い少女に一発よ？」

「きつめに言っておきます。お話したいことがあるのですが、後程会議室に来ていただいてよろしいですか？」

「わかったわ」

ベルオスが去った途端食堂は騒がしくなった。

『衛兵を一発だってよ』

『あんな細い身体にどこにそんな力が』、『怒らせたら間違いなく死ぬな』などとひそひそ話が聞こえてくる。

「サラこの剣あげる。いらないし。それに用事が出来たから行くね？ またねサラ」

「はい！ またです飛鳥様」

飛鳥は食堂を後にした。

ベルオスとの第二ラウンドが始まろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9339h/>

こんな世界イヤッ！

2010年10月27日13時55分発行